

18 かがわ なかどおり 香川 中通 C 遺跡第 7 次調査

渡辺 務

- 1 調査地点 香川五丁目 1392-1、1393-3
- 2 調査期間 令和2年4月7日～5月26日
- 3 調査主体 (株)アーク・フィールドワークシステム
- 4 調査担当者 渡辺 務
- 5 調査目的 集合住宅建築工事に伴う事前調査
- 6 調査面積 240.6㎡
- 7 遺跡の時期 古墳後期、平安、中世、近世
- 8 遺跡の位置と立地

調査地点は、茅ヶ崎市中央西部の砂丘地帯の北端部にあたり、JR相模線香川駅の北北西約250mに位置します。遺跡は海岸から約4.5km内陸に入り、相模川の東方約2.5kmに所在します。調査地点の標高は南側のA区で7.4～7.5m前後、北側のB区で7.2～7.5mを測りほぼ平らですが地山面は南から北側に向かって傾斜する地形に立地します。

9 調査の経緯と経過

調査は、埋蔵文化財に影響が及ぶ建物範囲（A区）と雨水浸透施設部分（B区）の2か所、計266㎡を対象とすることになりました。実際の調査ではA区で安全対策のセットバックを行ったため、調査面積は240.6㎡に変更になりました。また、想定より確認遺構も少なく調査が順調に進んだことから終了時期は予定より早まり5月中旬に終了しました。

10 調査の概要

調査はA・B区共に2面の調査を行い、A区では第1面の調査で近世の各種遺構を、第2面では中世から平安時代の遺構を検出しました。またB区では第1面で平安時代の遺構を、第2面では古墳時代後期の遺構を調査しました。確認された遺構は、竪穴状遺構1基、掘立柱建物跡1棟、土坑9基、溝13条、井戸1本、ピット47口です。また遺物は、古墳時代後期の土師器、平安時代の



第1図 調査地点位置図（1/10,000）

土師器、須恵器、灰釉陶器、中世陶器、青磁、近世陶器、磁器などが整理箱2箱分出土しました。

古墳時代後期

B区第2面でピット1口を確認しました。

平安時代

A区で井戸1本、ピット1口を、B区で溝2条を確認し、少量の土師器や須恵器が出土しました。

中世

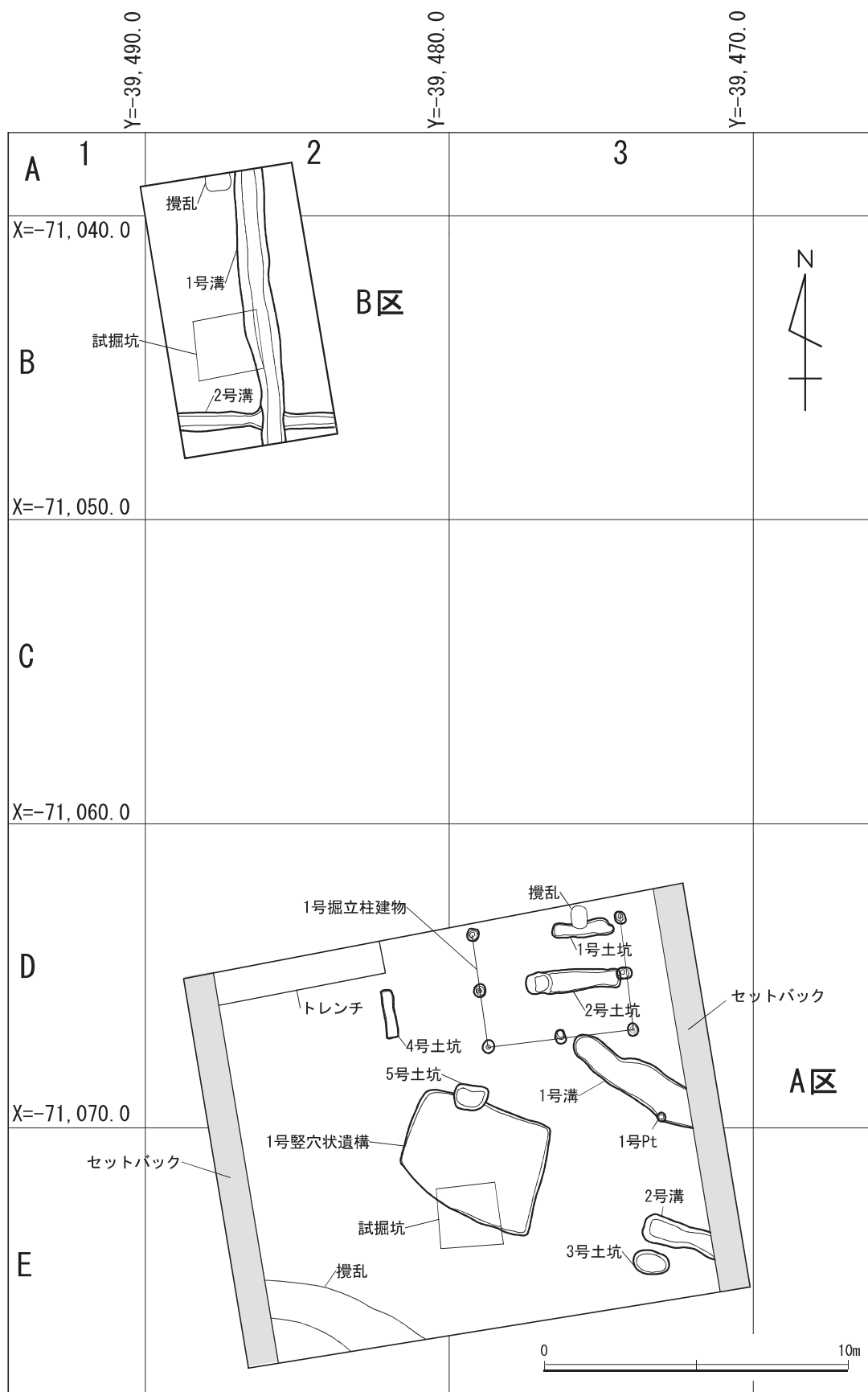
A区の第2面で検出した大半の溝や土坑、ピットが該当し、今次調査の主体になる時代と考えられます。11号溝からは瀬戸・美濃大窯期の播鉢や捏鉢の破片が出土しています。

近世

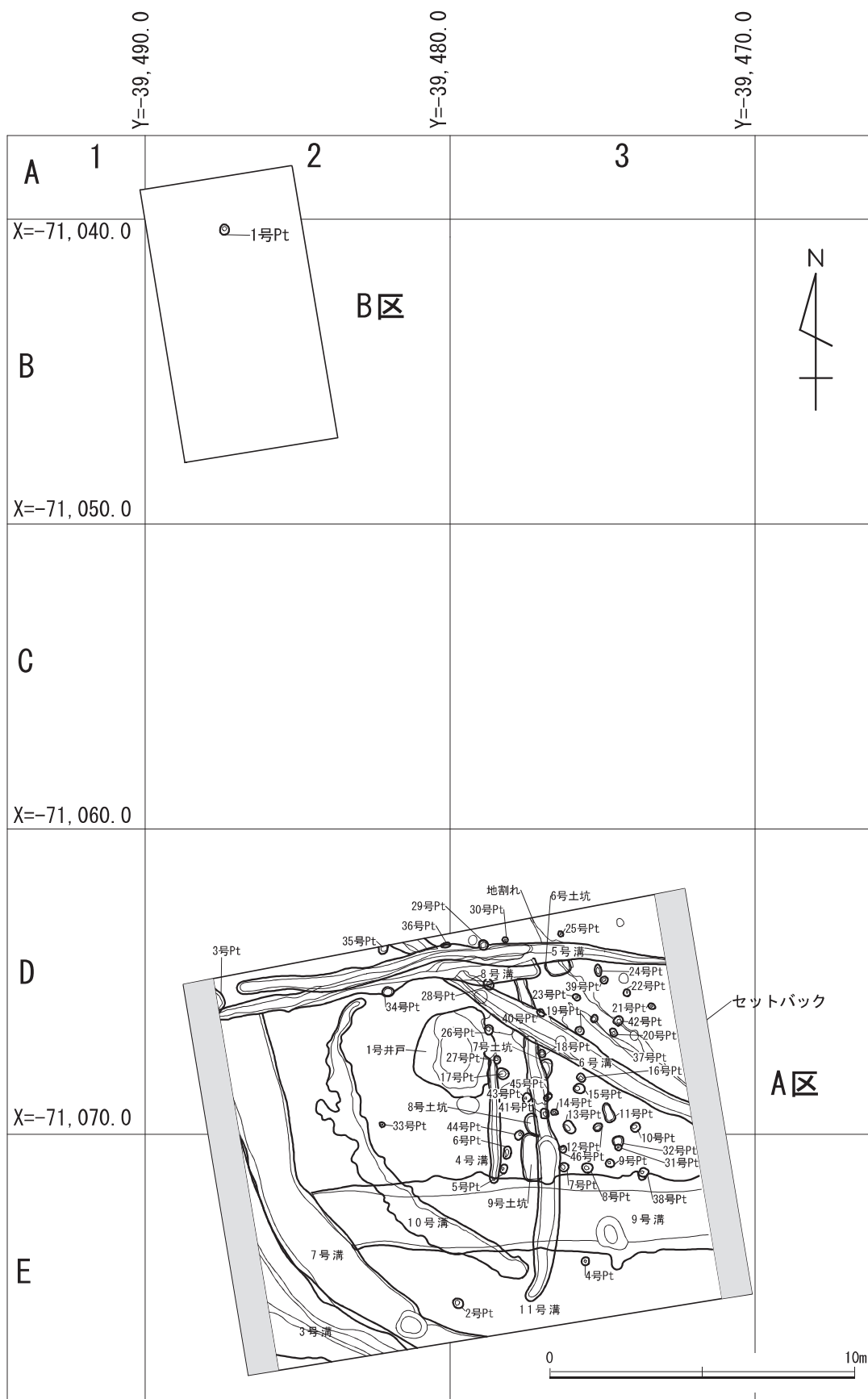
A区の第1面で検出した竪穴状遺構や掘立柱建物跡、溝、土坑などが該期の所産と考えられます。土坑には宝永スコリア廃棄土坑が含まれます。

11 まとめ

A区は砂質土を主体とすることから砂丘斜面地に、B区は粘質の黒褐色土が厚く堆積することから砂丘間凹地の湿地帯に立地することが明らかになりました。



第2図 遺構配置図 (第1面) (1/200)



第3図 遺構配置図（第2面）（1/200）



写真1 調査前全景(南東より)

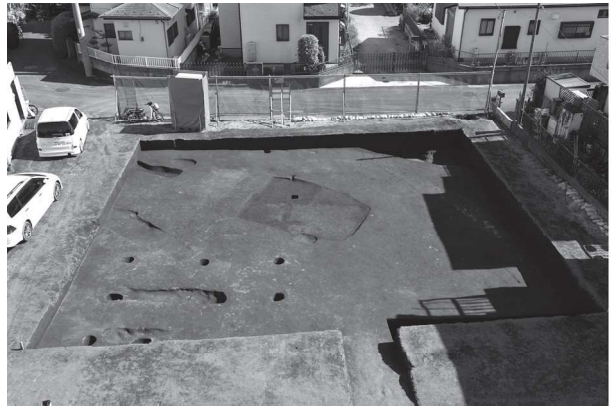


写真2 A区第1面全景(北より)



写真3 A区第2面全景(北より)



写真4 B区第1面全景(北より)

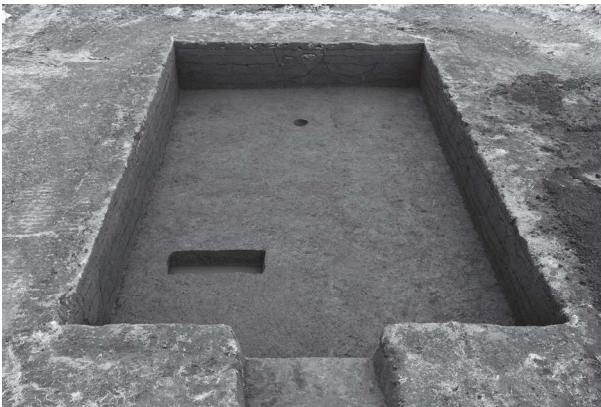


写真5 B区第2面全景(南より)



写真6 A区1号掘立柱建物跡全景(東より)



写真7 A区1・2号土坑検出状況(南より)

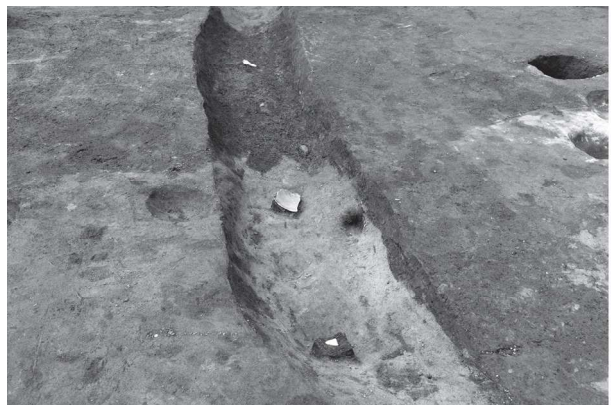


写真8 A区11号溝遺物出土状況(北より)

19 ^{あかばね に ず} 赤羽根 二図B遺跡第8～11次調査

鈴木 綾・藤井 秀男

- 1 調査地点 赤羽根 398-10、14、15
- 2 調査期間
第8次 令和2年5月12～14日
第9次 令和2年5月20～22日
第10次 令和2年5月26～27日
第11次 令和2年6月25日
- 3 調査主体 茅ヶ崎市教育委員会
- 4 調査担当者 加藤大二郎・鈴木 綾・三戸智也（社会教育課）
- 5 調査目的 個人住宅建築に伴う埋蔵文化財の記録保存
- 6 調査面積 25.5㎡、24㎡、15.25㎡、9㎡
- 7 遺跡の時期 縄文中・後期、弥生、奈良、平安、中世、近世、近代
- 8 遺跡の位置と立地

現在の茅ヶ崎市街地は約7,000年前の縄文海進時には海中に沈んだ土地で、その後の海退に伴い南西部には自然堤防地帯が、南東部には砂丘地帯が形成された。

二図B遺跡（以下、本遺跡）の北方400mには高座丘陵南縁の崖が30m以上の比高で東西方向に続くが、これが縄文海進の海食崖と捉えられている。この崖に平行するように帯状の砂丘列が北から順に形成され、現在10列に分類されている。

本遺跡が立地するのは赤羽根砂丘とも呼ばれる北から4番目の砂丘で、近世以降の大山街道（田村通）が通り、4km以上の延長を持つものである。

本遺跡ではこれまで7回の発掘調査が実施されている。中でも、新湘南バイパス建設に伴う第1次調査では8世紀代の竪穴建物址6軒のほか中世を主とする溝状遺構や井戸址、土坑など多様な遺構群が発見されている。

今回の調査地点はJR東海道本線茅ヶ崎駅の北東約2.3km、JR相模線香川駅の東南東約1.9kmに位置する。北側市道際の木造建物と南側の畑地が事業地で、調査時の標高は約10mを測る。

9 調査の経緯と経過



調査地点位置図（1/10,000）

今回の調査は個人住宅建築工事に伴うものであったが、事業全体としては宅地造成であり、引込み道路部分については第7次調査として令和元年に発掘調査が実施されている。

区画分譲後、各住宅の建築確認が申請され、地盤改良等によって埋蔵文化財に影響がある案件については必要部分の発掘調査を茅ヶ崎市教育委員会が行うことで申請者の了解を得た。

分譲区画内での調査作業完結を求められたため、第8～10次調査では対象範囲を分割して調査を進めた。1日ごとに重機による盛土・包含層掘削、遺構確認、遺構掘削、記録作成、埋め戻しの繰り返しであるため、各調査区は3×3mを基準に設定した。

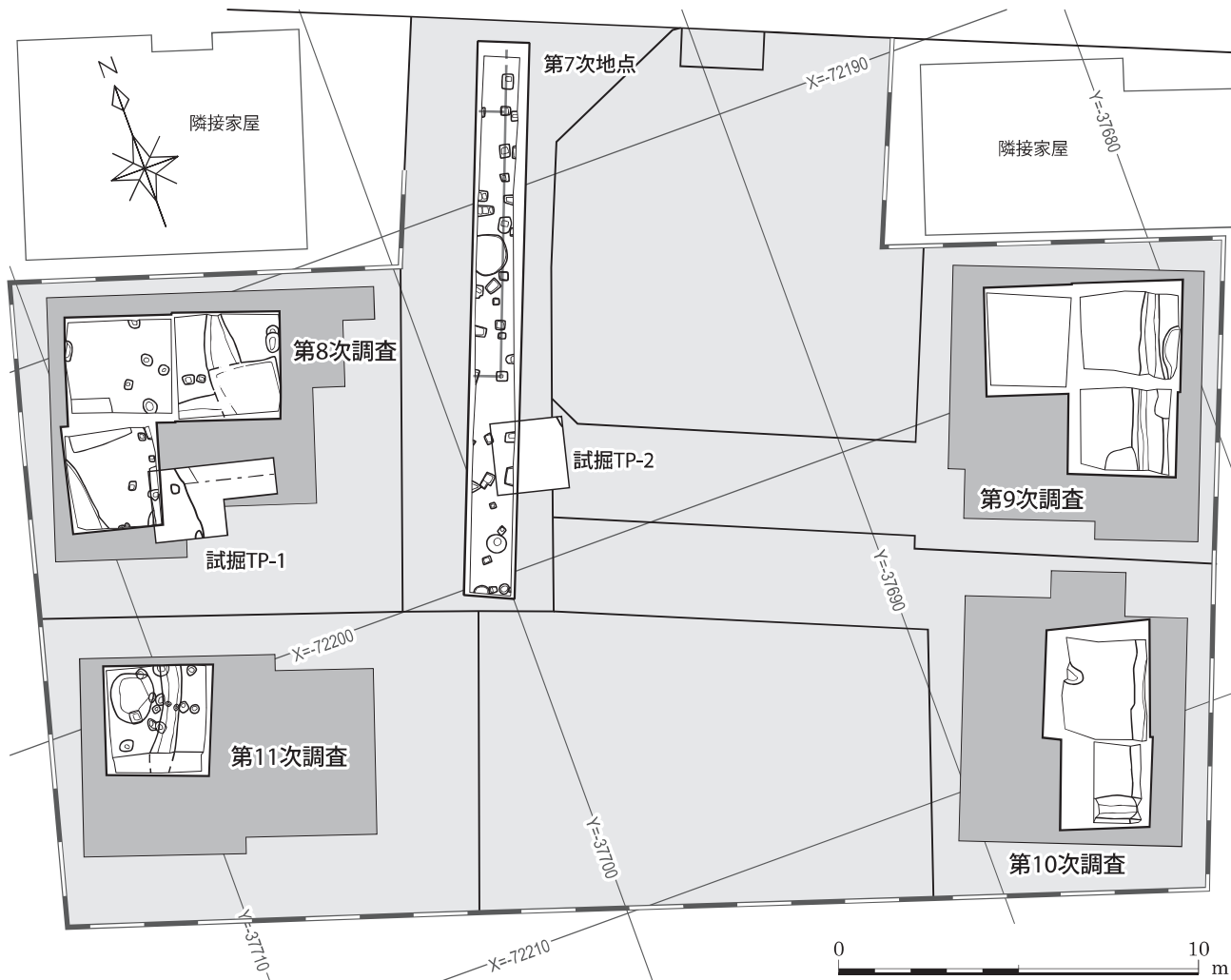
10 調査の概要

4地点とも造成工事によって約1mの盛土が見られたが、その下には宝永火山灰を含む旧耕作土以下の堆積土が観察された。時間的制約もあり、遺構確認は地山となる第IV層上面で行った。

各次調査で発見された遺構は次の通りである。

【第8次】 竪穴状遺構2基、溝状遺構2条、ピット18穴。

【第9次】 溝状遺構1条、土坑1基。



開発事業地および調査区配置図 (1/200 試掘 TP-1,2 は確認調査地点)

【第 10 次】 溝状遺構 2 条、ピット 1 穴。

【第 11 次】 溝状遺構 1 条、土坑 1 基、
ピット 14 穴。

出土遺物は各次とも少なく、小片がほとんどである。構成はかわらけが主体で、少量の土師器が混じり、砥石破片 1 点（第 11 次調査土坑 1 出土）も見られる。以下、主要遺構の概略を記す。

第 8 次調査では 2 基の竪穴状遺構が重複して確認され、竪穴状遺構 1 は一辺約 2m の方形で、掘り込み面から中世の構築と捉えられる。竪穴状遺構 2 は竪穴状遺構 1 より古く、試掘 TP-1 で確認された遺構に続く可能性が考えられる。

事業地東方の第 9・10 次調査では北北東－南南西に延びる溝状遺構が確認された。幅は 50～80cm と比較的小規模だが、深さは最大 60cm に達する。出土遺物や掘り込み面から中世の構築と考えられる。

事業地中央の第 7 次調査では建物の柱穴となる中世のピットが多数発見されているが、第 8・

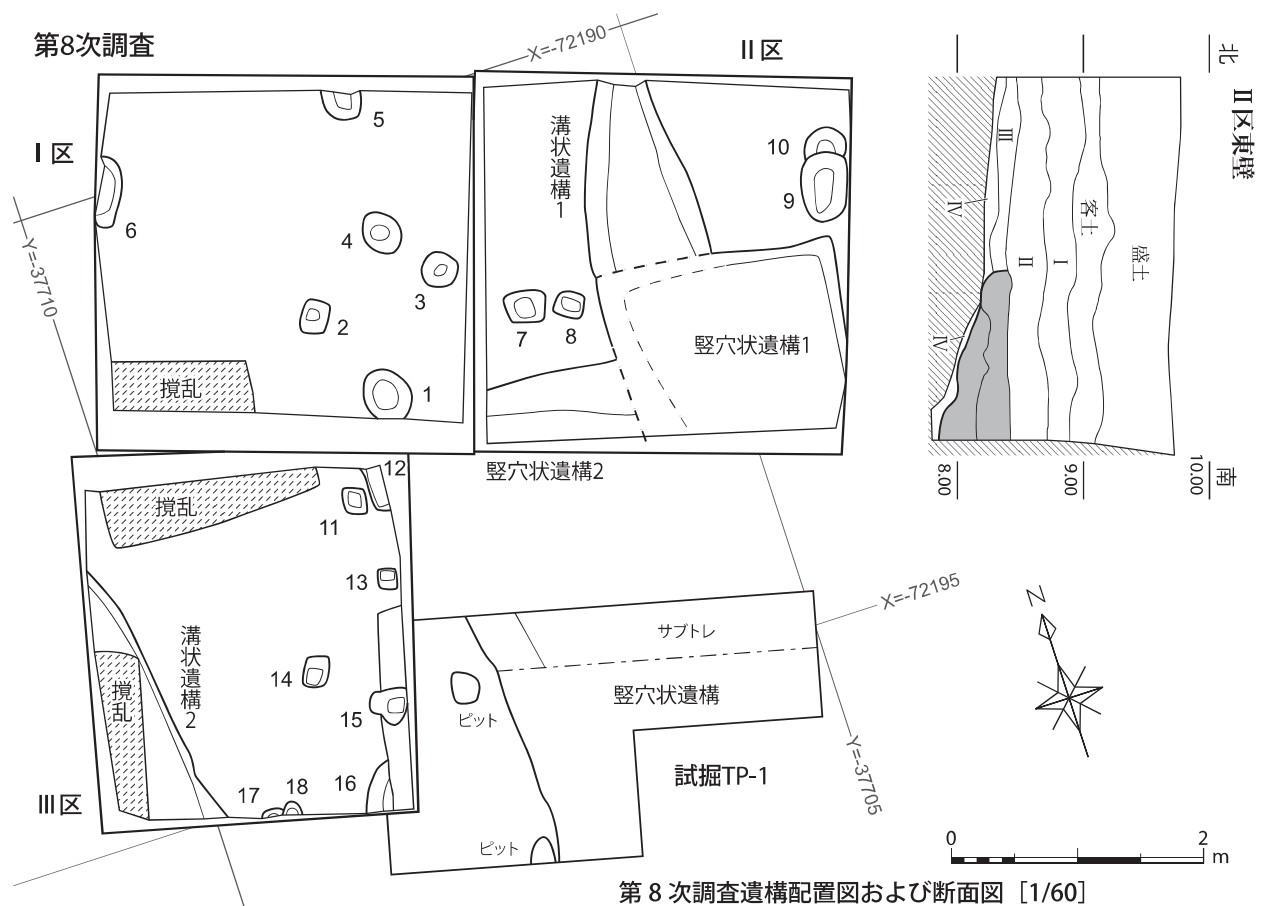
11 次調査でも類似するピットが確認された。平面形は方形と楕円形が見られ、覆土の特徴から多くが中世遺構と推定される。建物址を想定するような規則性は明確に捉えられていない。

11 まとめ

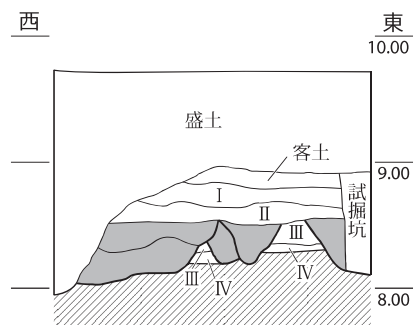
本遺跡は 2010 年に実施された下水道関連調査を契機に南と東方向に範囲拡大され、今回の調査地点も拡大された南部に位置する。

今回の調査では、中世と推定される竪穴状遺構や溝状遺構、ピットなどが発見された。遺物は少なく、かわらけを主体とし、若干の土師器が見られた。分布状況は、遺構・遺物とも事業地西側の第 8・11 次地点の密度が高く、「屋敷地」と「畑地」のような土地利用の違いが想定される。

また、砂丘北側縁辺に展開する奈良時代の集落（第 1 次調査成果）から南側大山街道沿いの近世～近代集落（明治 15 年迅速測図）へと変遷していく中で、本地点の性格を考えていくことが重要と思われる。



Ⅲ区南壁



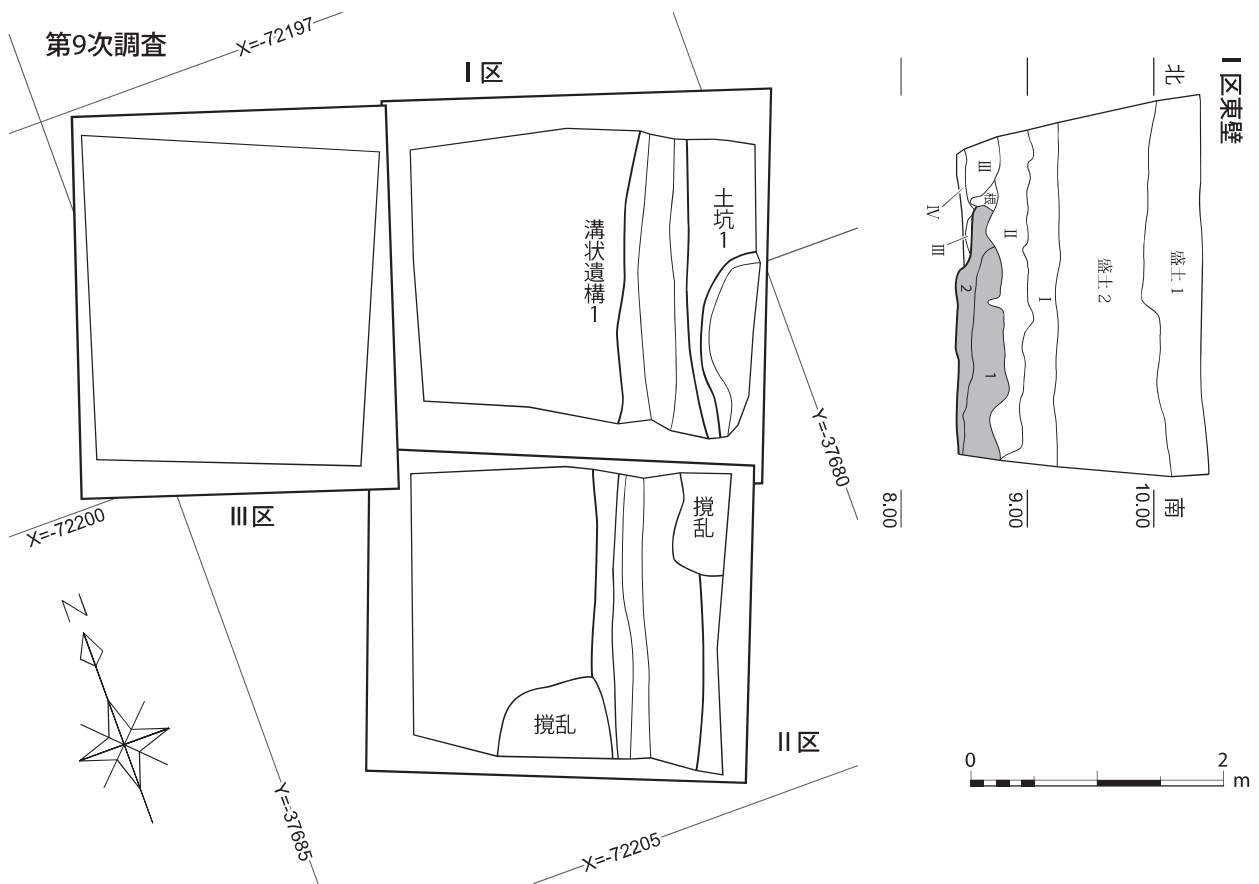
Ⅱ区全景 [南から]



Ⅲ区全景 [北から]

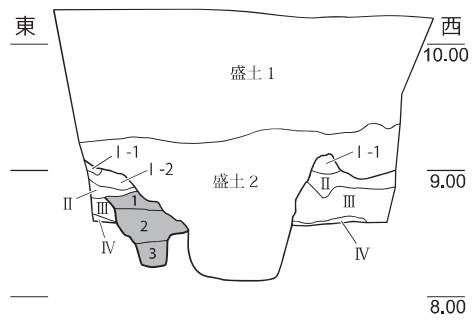


Ⅰ区西壁土層堆積状況 [東から]



第 9 次調査遺構配置図および断面図 [1/60]

II 区南壁



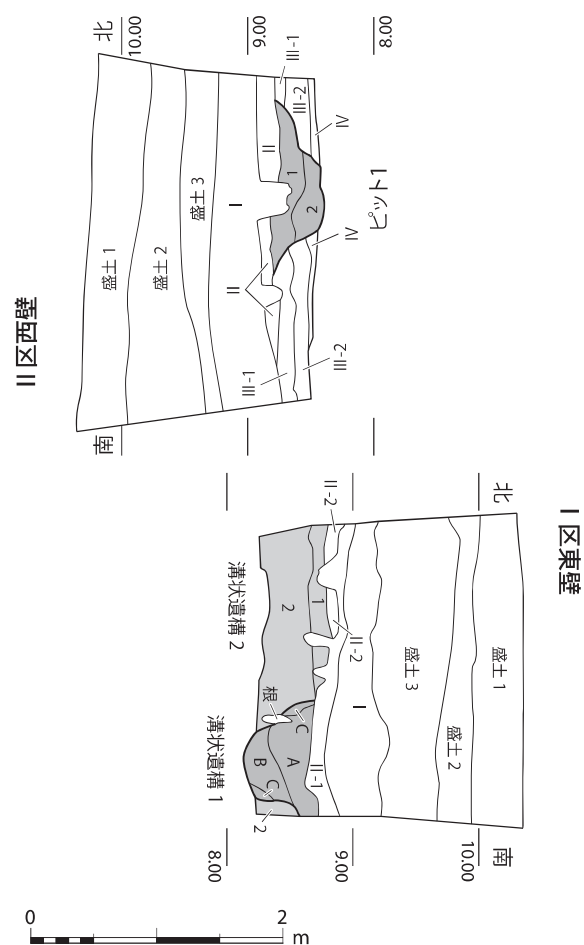
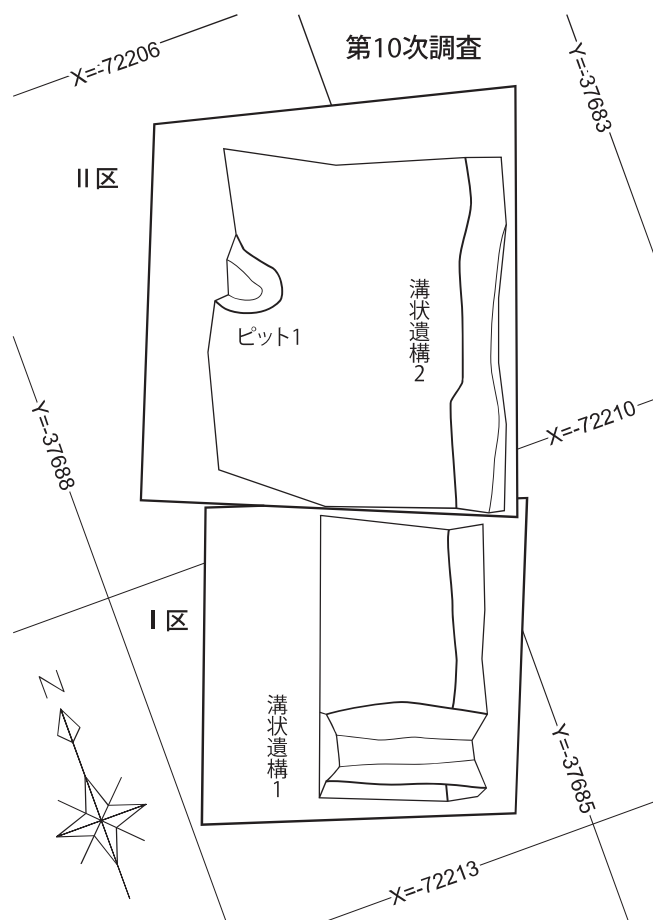
I 区全景 [西から]



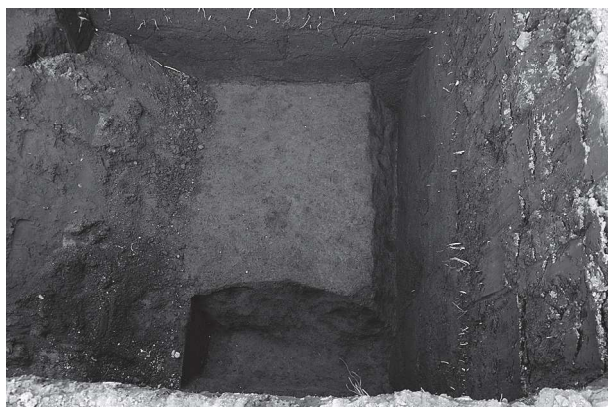
II 区南壁土層堆積状況 [北から]



II 区全景 [南から]



第10次調査遺構配置図および断面図 [1/60]

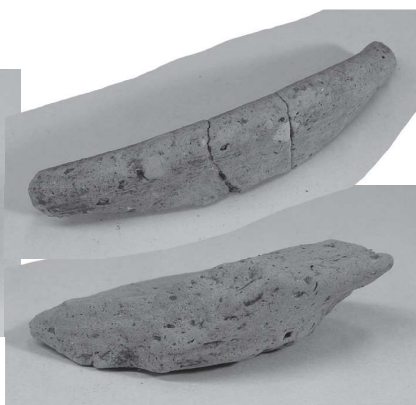


I区全景 [南から]

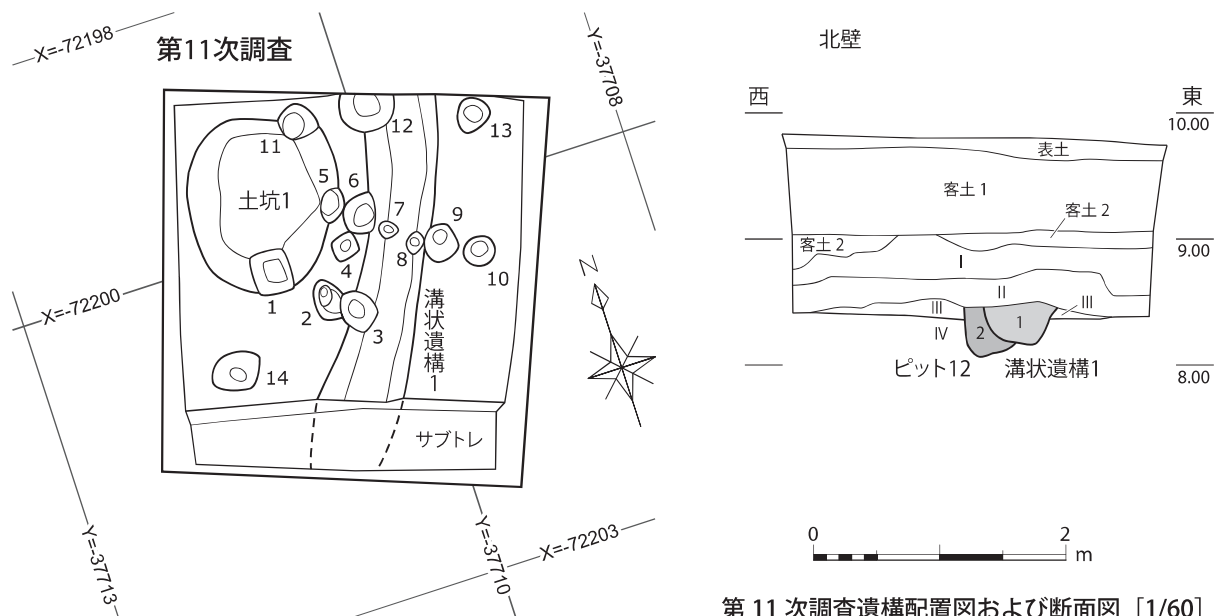


II区北壁土層堆積状況 [南から]

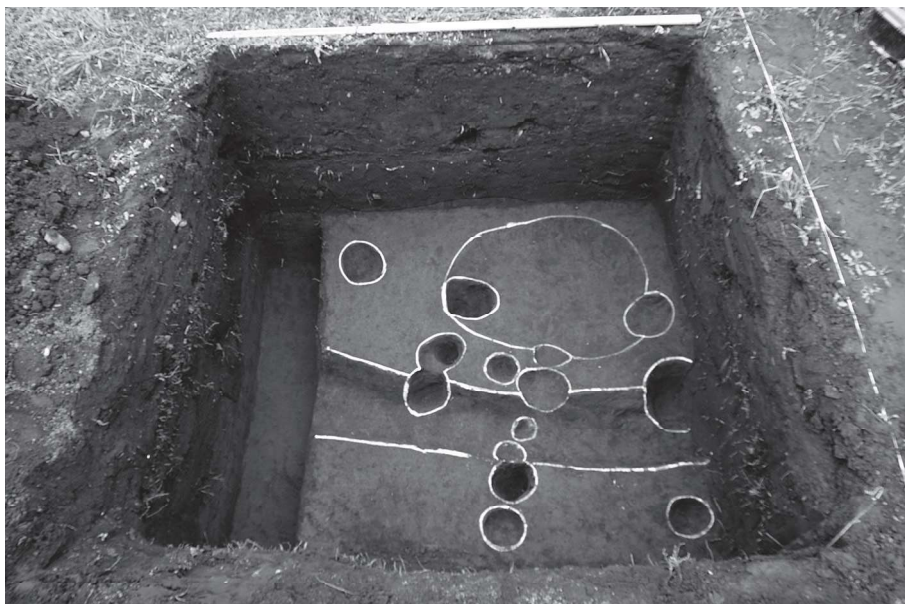
第8次調査出土遺物 [かわらけ]



第11次調査出土遺物 [砥石]



第11次調査遺構配置図および断面図 [1/60]



調査区全景 [東から]



調査地点近景 [北東から]

20 ひしぬま ながまち 菱沼 長町 A 遺跡第 1 次調査

鈴木 綾・藤井 秀男

- 1 調査地点 菱沼二丁目 1434-10,12
- 2 調査期間 令和 2 年 6 月 5 日
- 3 調査主体 茅ヶ崎市教育委員会
- 4 調査担当者 鈴木 綾（社会教育課）
- 5 調査目的 個人住宅建設に伴う埋蔵文化財の記録保存
- 6 調査面積 6.6㎡
- 7 遺跡の時期 弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世、近代
- 8 遺跡の位置と立地

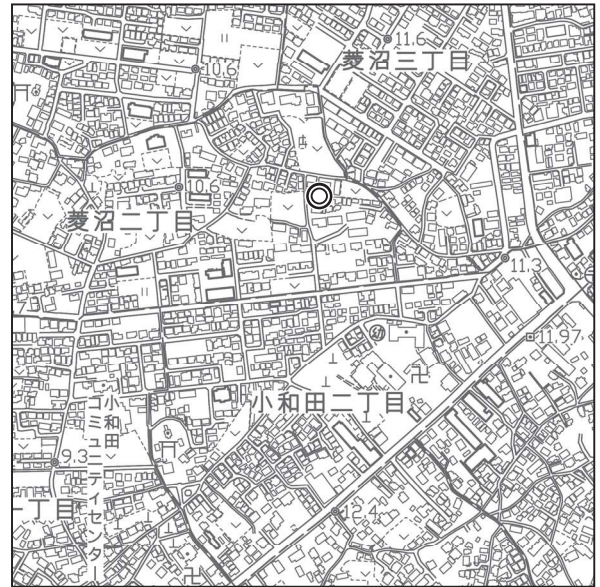
長町 A 遺跡（以下、本遺跡）は茅ヶ崎市南東部に広がる砂丘地帯の一角に立地する。東西方向に延び、全 10 列と認識されている砂丘列の中で、第 6 砂丘は高度・幅とも最も発達し国道 1 号が通るものである。その北側、千ノ川の凹地を挟んだ第 5 砂丘上に本遺跡を含む遺跡群が展開する。砂丘上はほぼ全域が埋蔵文化財包蔵地に指定され、11 遺跡に分割されている。時代的に中心となるのは奈良・平安時代で、多くの地点で集落址を構成する遺構・遺物が確認されている。

本遺跡は東西約 100m、南北約 100m の範囲に広がり、これまでに 2 回、公共下水道敷設工事に伴う調査が実施されている。平成 8 年度調査では奈良・平安時代の溝状遺構 1 条と須恵器・土師器・陶磁器が、平成 10 年度調査では遺構未確認ながら、土師器・須恵器・かわらけなどが発見されている。

今回の調査地点は JR 東海道本線茅ヶ崎駅から東北東に約 2.8km、辻堂駅から北西に約 1.3km の位置で、遺跡の北西部に位置する。昭和 40 年前後に宅地化される前は長年畑地として利用されてきたと推定される。現況は前身建物解体後の更地で、標高約 13m を測る。

9 調査の経緯と経過

今回の事業は既設建物を解体し、敷地を分割して 2 棟の木造住宅を新築するというものであった。令和 2 年 5 月 11 日に確認調査を実施し、埋蔵文化財の取り扱いについて事業者と茅ヶ崎市教



第 1 図 調査地点位置図（1/10,000）

育委員会による協議が行われた。2 棟の内、東側建物は地盤改良工事が予定されたことから、工事によって影響を受ける部分を対象として記録保存のための発掘調査を行うことが決定した。現地調査は茅ヶ崎市教育委員会が担当し、社会教育課鈴木が従事した。

整理作業は令和 3 年 5 月中旬から行い、正式報告作成に向けての作業をほぼ完了している。

10 調査の概要

調査対象は地盤改良を行う東西 5.5m、南北 1.2m の長方形範囲で、確認調査 TP-3 と重なる。南側隣接建物との境界には高さ 1.5m ほどの擁壁が築かれていることから、宅地化にあたり砂丘南側の緩斜面だった部分に盛土を実施し、平坦面を造り出したと考えられる。

これを裏付けるように、調査区南側を中心に厚い盛土が認められ、かつ、前身建物解体時の攪拌で本来の堆積土層は部分的な把握となった。

調査の結果、確認された遺構は溝状遺構 1 条、ピット 3 穴である。遺物は遺構覆土からの出土を中心に土師器・須恵器・かわらけが発見された。また、不確実であるが、弥生土器や灰釉陶器・鉄製品もみられる。遺物総量は 800g 余りと少なく、

小片が多い。

溝状遺構 1 は調査区中央部で確認され、南北方向からやや西に寄った主軸で、調査区外に延びている。幅約 2.4m、深さ約 30cm を測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は広く平坦である。出土遺物の主体は古代の土師器・須恵器であるが、かわらけも数点みられる。本址の時期は遺構掘り込み面の状況や出土遺物から中世と推測される。

ピット 3 穴はいずれも調査区壁に掛かり、全容は明らかでない。覆土に宝永軽石を含むことからピット 3 は近世以降、ピット 1・2 は掘り込み面から古代の構築と考えられる。また、ピット 1

からは須恵器甕肩部片が出土した。

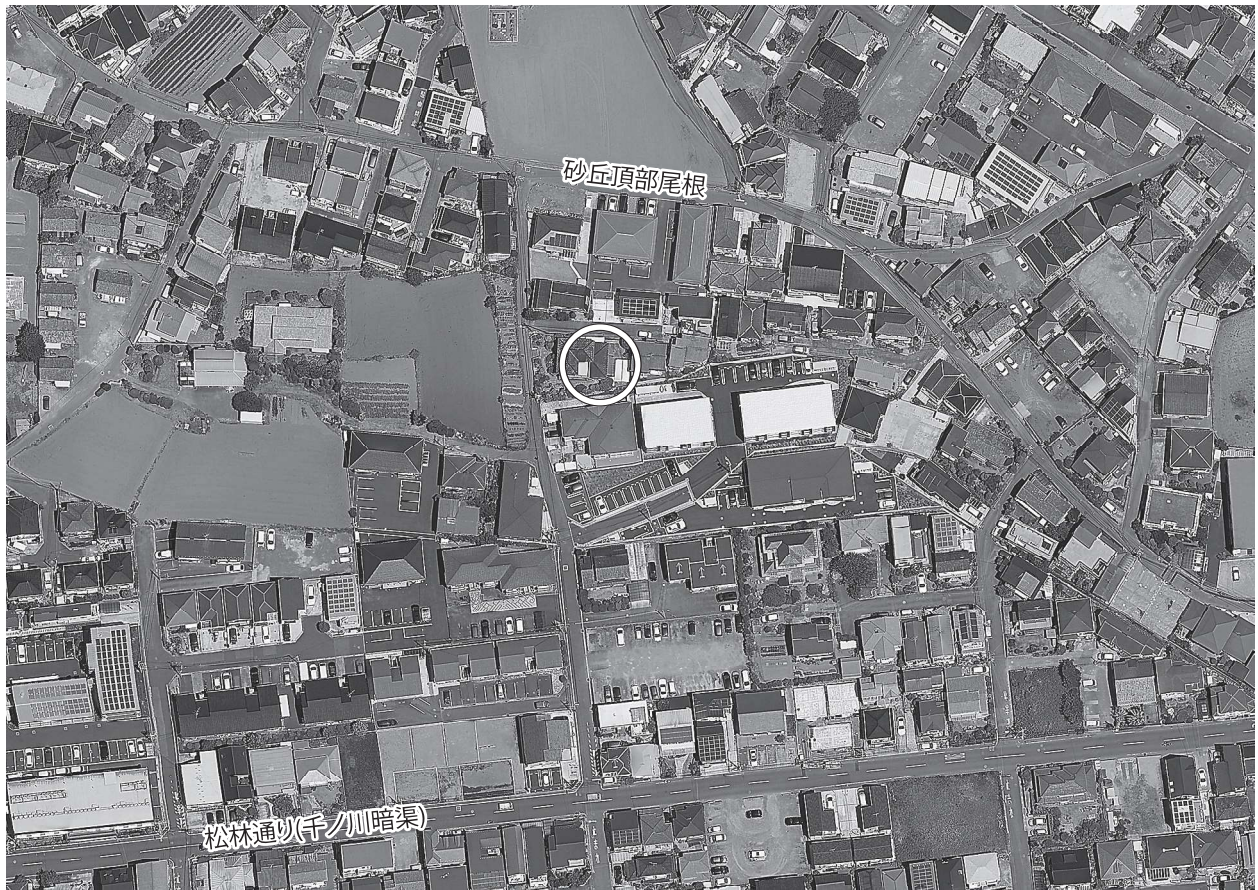
11 まとめ

今回の調査は長町 A 遺跡における初めての本格調査であった。限られた範囲内ながら、古代から中世、近世以降の遺構が確認されるとともに、土師器・須恵器・かわらけ等が発見された。

中世の構築と推定される溝状遺構 1 は砂丘南斜面の傾斜方向と軸が一致するが、北側 3m に位置する確認調査 TP-2 では認識されていない。前身建物解体時に攪拌された可能性も考えられるが、微地形の復元を含めて、今後細かく検証する必要がある。



調査区および遺構配置図 (1/100 TP-1～3 は確認調査地点、M1：溝状遺構 1、P1～3：ピット 1～3)



調査地点周辺の景観 (2018年撮影グーグルアース画像を引用 白丸が調査地点)



調査区全景 (西から)



ピット1・2完掘状況 (東から)

溝状遺構1出土遺物

ピット1出土遺物



かわらけ



土師器坏



須恵器甕

こわだ いけぶくろ 21 小和田 池袋 A 遺跡第 2 次調査

降矢 順子

- 1 調査地点 小和田 1 丁目 1543 番 1 の一部
- 2 調査期間 令和 2 年 4 月 24 日～ 7 月 16 日
- 3 調査主体 株式会社齊藤建設
- 4 調査担当者 降矢順子
- 5 調査目的 店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
- 6 調査面積 630㎡
- 7 遺跡の時期 古墳、奈良、平安、中世、近世
- 8 遺跡の位置と立地

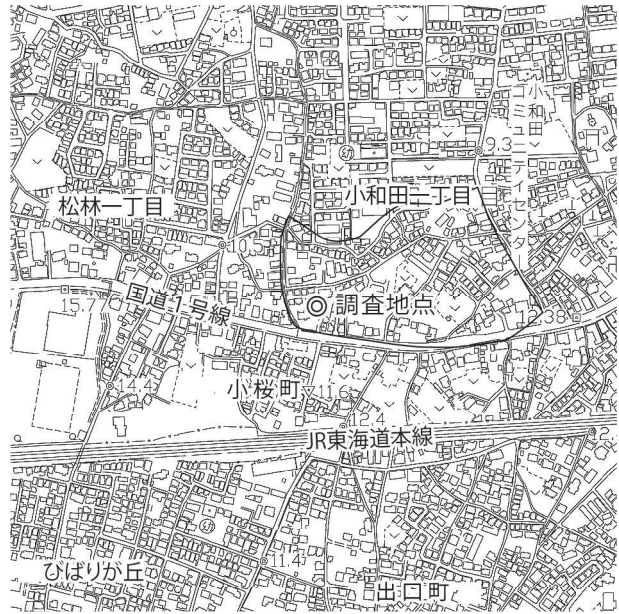
池袋 A 遺跡は、茅ヶ崎市南部の沖積低地は、東の藤沢市境川から西の平塚市花水川までの東西約 13km、相模湾から北へ 4 ～ 6km の範囲に広がる湘南砂丘地帯の一部にあたる。沖積低地東部の砂丘の卓越した地域と西部の相模川・千ノ川流域に形成された自然堤防・旧河道などが交錯した地域に区分できる。

本調査地点は、東部の砂丘地域に位置している。現況に則すと、JR 茅ヶ崎駅の北東 2.1km の国道 1 号線の北に接している。調査地点の立地する砂丘は、およそ 10 列が確認されている砂丘列の海から 5 番目の砂丘と推定されている。

9 調査の経緯と経過

茅ヶ崎市小和田一丁目 1543 ー 1 の一部外 4 筆における開発に伴う埋蔵文化財の取扱いについて 2019 年 1 月 23 日に照会を受けた茅ヶ崎市教育委員会は、当該地が池袋 A 遺跡の範囲内に位置することから、2020 年 2 月 25 日に試掘・確認調査を実施した。その結果、古代遺物の他に古代の包含層から貝が集中して出土するなどしたため、工事によって埋蔵文化財が影響を受ける部分を対象とした発掘調査を実施することとなった。調査面積は、事業面積 1295.75㎡に対し 630㎡で、残りの部分については現状保存とした。

調査対象地は、敷地北西の一段高い部分と敷地南東の国道 1 号とほぼ同じ高さの部分に分かれていた。調査では、南東の国道 1 号に接する部



第 1 図 調査地点位置図 (1/10,000)

分を A 区、北西部の一段高い部分を B 区とし、A 区から調査を行った。

A 区の調査は令和 2 年 4 月 24 日に開始し、5 月 22 日に終了した。調査では、表土・現代造成土を取り除いた面を 1 面とし、次いで試掘 TP1 の 3 層上面で貝集中範囲が確認されている 4 層上面での調査を行った。

A 区の調査終了後、5 月 26 日から B 区の調査を開始した。調査では表土・現代造成土を取り除いた後、試掘坑及び現代攪乱の壁面の土層観察から、3 層の上面に平安時代末から中世初頭にかけて堆積したと思われる飛砂が厚く堆積していることが判明したので、飛砂を取り除いて 3 層上面を検出し、その後遺構確認や遺物の取り上げを行い、調査を進めた。B 区の調査は 7 月 16 日に終了した。

本地点の堆積土層は、試掘調査の結果をもとに、I ～ VI 層に分層した。I 層は表土・造成土、II 層は灰褐色砂層～灰黄褐色砂層で、部分的に細かな堆積が幾つか重なっている部分がみられる。海岸からの飛砂堆積と考えられる。III 層は暗褐色砂質土で、円形の黄灰褐色砂層が多くみられる土層で、鎌倉市内の砂丘地域の発掘調査で確認される砂丘

後背湿地堆積に極似している。Ⅳ層はしまりあり、パミスを少量含む暗褐色砂質土で、円形の黄灰色砂層がみられる。Ⅴ層はしまりがあり粘性の少ない黄灰褐色砂層で、円形の黄灰色砂層が少量みられる。Ⅵ層は暗灰色砂層で円形の黄灰色砂層は全く見られない。

10 調査の概要

本地点の調査では、調査対象地南西隅辺から敷地北東隅辺に向かって延びるラインを頂部として、北西と南東に向かって下がる砂丘の斜面を確認した。北西に向かって下がる斜面には砂丘後背湿地堆積が良好に残り、砂丘の斜面が良好に検出できたが、南東部は南の国道1号の高さに合わせるように削平された部分が多く、すでに失われている堆積（斜面）が多い。

検出した遺構は、A区で土坑1基、ピット2基、B区で溝1条である。南側の斜面は国道1号に関わる近世以降の削平などによって大きく失われているが、北側の斜面は古墳時代以降の後背湿地堆積（Ⅲ層下部からⅤ層上面）であることが判明した。

A区で検出した土坑はいわゆる「貝溜り（土坑）」で、確認規模は長軸118cm、短軸56cm、深さ35cmを測る。覆土は暗褐色～黒褐色砂質土で、覆土最上層には多くの貝殻が含まれている。

B区で検出した溝は幅150～230cm、深さ90cm前後で断面形は皿型からU字形を呈している。性格は不明。これらの遺構覆土からは須恵器長頸壺、土師器甕、小型壺、坏などの土器片が出土している。年代は7世紀後半～9世紀代と考えられる。また、土器片が集中して出土した範囲が、A区で2ヶ所、B区1ヶ所見つかっている。

11 まとめ

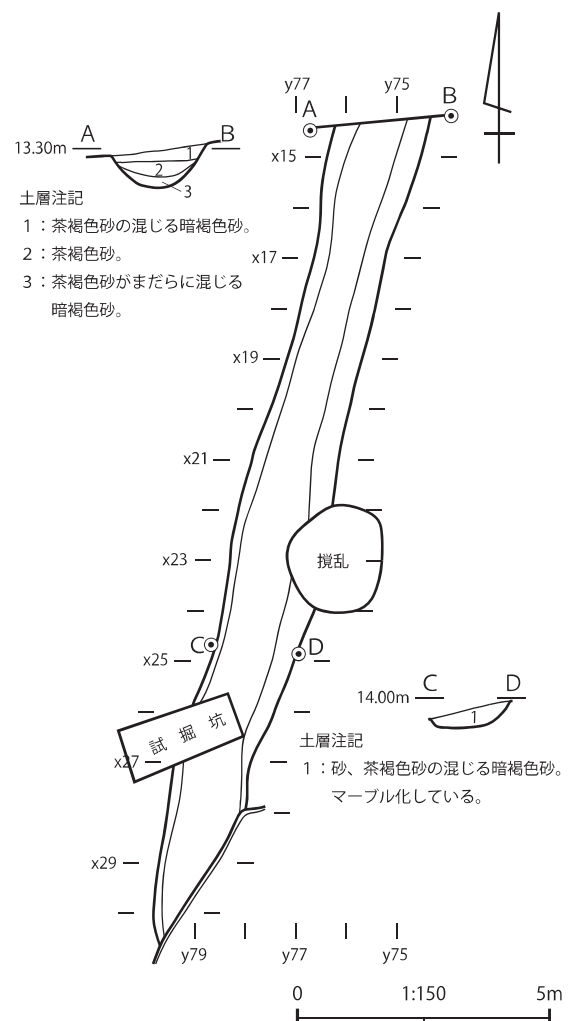
B区で確認した堆積土層を基準に本地点の変遷を考えると、古墳時代（Ⅴ層）以前は海岸からの飛砂が厚く堆積している。出土遺物は確認されていない。

Ⅴ層からⅢ層（古墳時代から奈良・平安時代頃）が堆積している間は、海岸からの飛砂がほとんど無く、砂丘後背湿地に近い空間であった。Ⅲ層上面には溝が構築され、土器片が溝やその周辺で比較的多く出土している。生活痕跡は薄いが、出土

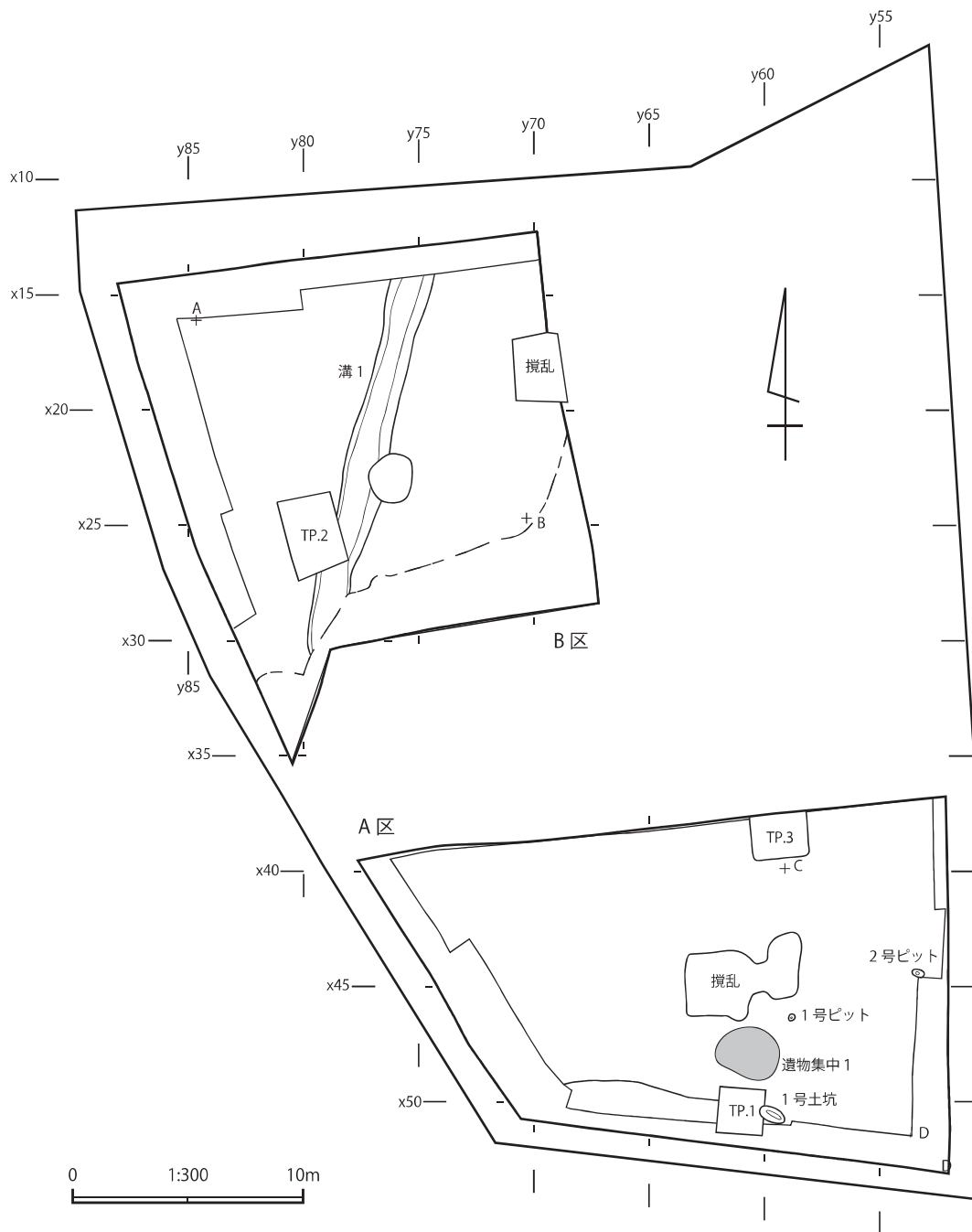
遺物等から見て居住地に隣接する祭祀的空間であったと考えられる。

Ⅲ層の堆積以降は海岸からの飛砂が厚く堆積している。この結果、現在の地形に近い姿がつくられた。A区、B区の調査では中世の遺構は確認されていないが、遺物はかわらけが数点、出土している。中世以降の東海道に関わる開発で削平されてしまった可能性を考えたい。

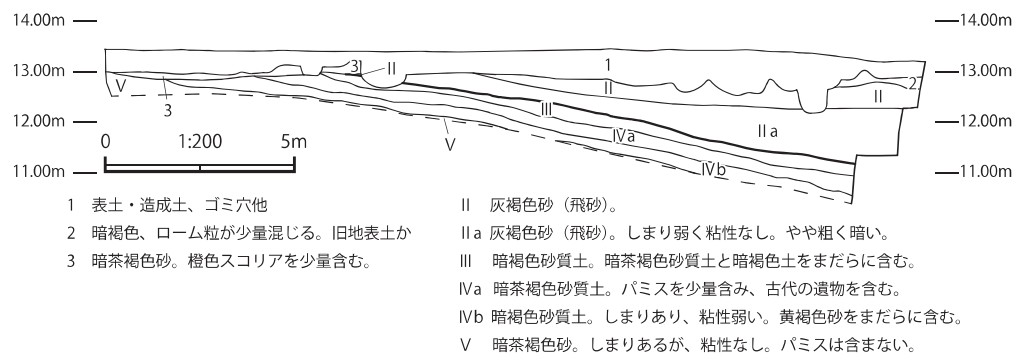
ちなみに、後背湿地の堆積土やその推定年代が類似している鎌倉市の海浜部の発掘調査では、砂丘間の低地（後背湿地堆積を残す谷状の低地）が飛砂などによって埋没した後に、平安時代の集落が営まれ、平安時代の集落を埋めた飛砂を削平して中世の遺構が構築されている。今後、周辺の調査においては後背湿地堆積土に注目して、集落等の関係を調査していくことが必要であろう。



第2図 B区1号溝（1/150）



第3図 遺構配置図 (1/300)



第4図 A区東壁堆積土挿図 (1/200)



1 B区3層上面（南東から）



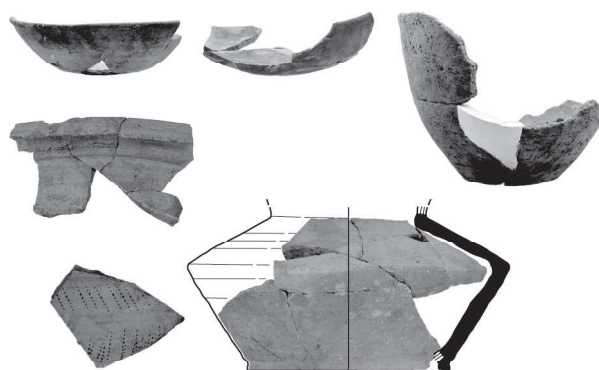
2 A区1号土坑（南から）



3 A区遺物集中1（南から）



4 B区1号溝（北から）



5 出土遺物